

<論文>

## 翻訳ストラテジー論の批判的考察

### Critical Discussion on Translation Strategy Theories

河原清志

金城学院大学

#### Abstract

This paper aims to critically review translation strategy theories that have been proposed abroad, and reconsider the significance and location of this concept in translation studies. Based on the fundamental nature as a well-planned action for achieving an aim or skillful planning, translation strategies are categorized into three research stances (descriptive, committed, pedagogical/evaluative) and two levels (macro/global, micro/local), and by being compared with the term translation norm, they are distinguished from translation shifts. Furthermore, they are minutely analyzed more as being cognitive, procedural and conscious conversion process than being results of textual and static product analysis. And suggestions are made toward bridging translation theories and practices as several practical translation strategies are proposed for translation working process.

#### 1. はじめに

本稿は、翻訳理論の基底的概念である「翻訳等価性」(translation equivalence) に大きく関わる「翻訳ストラテジー」(translation strategies) について、海外の先行研究を批判的に分析し、翻訳理論のなかでの意義や位置づけを再考することを目的とする。

これまでの翻訳理論では、一般的に翻訳ストラテジーとは、(1) 広義では、「翻訳する状況によって定まる目標を達成するために翻訳者が使う最も効果的な、一連の(緩やかに定式化された)規則ないし原則」(Jääskeläinen, 1993, p. 116)、(2) 狭義では、翻訳対象のテキストによって生じる特定の問題や翻訳タスクを遂行するうえでの特定の問題を解決する際に使う手続きや方法 (cf. Krings, 1986, p. 175; Lörcher, 1991, p. 76; Chesterman, 1997, p. 92) であるとされてきた (Palumbo, 2009, p. 132)。そして実務レベルでも、翻訳シフトの一部を意識化し、自らの翻訳行為における指針や方針としている場合も多くある(例えば、翻訳実務指南書に見られるテキストレベルでの品詞転換の方法として、河原 2010<sup>註1</sup>)。理論研究の文脈では、翻訳シフトの意識化が細部にわたるものから翻訳全般に対する姿勢や目標にいたるまで、以下で検討するようにさまざまなストラテジーが提唱されている。主要な例を分類しつつ挙げると、以下のとおりである (河原 2013a, p.121)。

- マクロ・ストラテジー：翻訳に関する全体的な方針・方策・身構え
  - ・自らの仕事に取り組む姿勢や目標：異質化と受容化 (Venuti, 1995)
  - ・テキスト全体についての計画あるいは考え方 (Pym, 2011)
- ミクロ・ストラテジー：訳出作業における個別の問題に対処するための詳細な方法
  - ・直接的翻訳（直訳など起点言語をそのまま踏襲する訳出法）と間接的翻訳（目標言語になじむように調整する訳出法）(Vinay & Darbelnet, 1958/1995)
  - ・8つの方法（テキスト全体に関係）と15の手続（センテンスおよびそれ以下の単位）(Newmark, 1988)
  - ・10の文法に関する方略、10の意味に関する方略、10の言語使用の意味に関する方略 (Chesterman, 1997)

（以上は、河原 2013a, p. 121 を敷衍して少し情報を付加したものである）

ところが、これらの翻訳ストラテジーの定義ないし位置づけは、ストラテジー分析をする個々の研究者の問題意識や関心事、あるいは分析者の社会文化的コンテキストや個人的なイデオロギーに引き寄せて、時として恣意的な分類に終始している場合もあり、翻訳学ないし翻訳研究全体における翻訳ストラテジーの定位として必ずしもわかりやすいものではない（同様の問題意識として、Chesterman, 2005; Gambier, 2010）。

そこで本稿では、先駆け的な研究を1つ (Vinay & Darbelnet, 1958/1995) 取り上げ、次にその後の翻訳ストラテジー論の海外での展開を批判的に検討しつつ、翻訳学ないし翻訳研究のなかで一つの大きな概念装置である翻訳ストラテジーの研究上の扱いのあり方について論じる。

## 2. J. ヴィネイ& J. ダルベルネ(1958年)の翻訳ストラテジー論

J. ヴィネイと J. ダルベルネは1958年、*Stylistique compare du français et de l'anglais* (Vinay & Darbelnet, 1958) で、フランス語・英語間の比較文体論の分析を行い、様々な翻訳のストラテジーと手順を明確にした。一般的な翻訳ストラテジーとして、直接的翻訳と間接的翻訳を挙げている。以下、詳細を記す。

### 直接的翻訳

- (1) 借用：起点言語の言葉がそのまま目標言語に転移される。
- (2) 語義借用：起点言語の表現や構造が直訳によって転移される。
- (3) 直訳：逐語訳のことである。

基本的には直訳が翻訳のための良い処方箋となる、としているが、直訳すると異なった意味になる、直訳すると無意味になる、直訳が構造的理由で不可能である、目標言語のメ

タ言語的経験の内部に対応する表現を持たない、言語の異なったレベルの何かに対応してしまう、という場合には、次の間接的翻訳を行うべきだとしている。

間接的翻訳

- (4) 転位：品詞転換のことである。義務的転位と選択的転位がある。
- (5) 調整：起点言語の意味と視点を変えるもので、直訳や転位が目標言語において不適切で慣用的でなくぎごちない場合にこれが正当化される。義務的調整と選択的調整がある。
- (6) 等価：同一の状況を異なった文体的・構造的手段で訳すことである。イディオムやことわざの翻訳の場合に有効。
- (7) 翻案：起点文化のある状況が目標文化に存在しない場合、文化的言及対象を変えることである。

この7つのストラテジーは、次の3つのレベルで作用する。

- (1) 語彙
- (2) 統語構造
- (3) メッセージ：発話とそのメタ言語的状況ないし文脈
  - \*メッセージは、語順と主題構造、接続語句を含む。

また、隷属（2つの言語体系の違いによる義務的な転位と調整）と、選択（翻訳者のスタイルや選好による非義務的な変更）という重要なパラメーターを説明し、選択という文体論の領域こそ翻訳者の主要な関心事であるとした。従って翻訳者の役割は「使える選択肢の中から選択して、メッセージのニュアンスを表現する」こととなる。

ヴィネイとダルベルネはさらに、起点言語から目標言語への移行の際に従うべき5つの手順のリストを挙げる。

- (1) 翻訳の単位を見つける。
- (2) 起点言語テキストを検討し、翻訳単位の記述的、情緒的、知的内容を考慮する。
- (3) メッセージのメタ言語的内容を再構築する。
- (4) 文体的効果を考慮する。
- (5) 目標テキストを作り、改訂する。

(1) 翻訳単位に関し、「語彙的単位」と「思考の単位」が結合したものとみなし、「発話の最小単位であり、その記号が個別には翻訳できないような形で結びついたもの」としている（Vinay & Darbelnet, 1995, p. 21）。具体的には、個々の単語、文法的に結合したまとまり、固定表現、意味的に結合したまとまり、である。また、分析を容易にするため、起点

テキストと目標テキストの両方の翻訳単位に番号を振り、それぞれのテキストに振られた同じ番号の対応関係を見ることで、どのような翻訳手順と翻訳ストラテジーが採られているかを見る、というものである。

この論考が（黎明期の機械翻訳系の議論とは別に）翻訳理論研究において初めて「等価」概念を打ち出したものだと言われている。但し、我々がいわゆる「等価」として論じている内容よりも、上述のようにかなり限定的な概念を扱っており、イディオムやことわざの翻訳の場合に有効だとしている。いずれにしても、この英仏語間の翻訳ストラテジーとその手順を示す論考は、一連の翻訳理論や等価理論の先駆けをなすもので<sup>註2</sup>、仏独語間（1963年）、英西語間（1977年、1982年）でも同様の研究書が出るなど、かなり大きな影響力を持った。

翻訳の手順と具体的なやり方を示した本書は、近代以前の二項対立図式（直訳 vs. 意訳）から大きく前進したといえる。本来、二項対立は離散的な対立軸ではなく連続体（cline）であって（Munday, 2009）、グラデーションに応じたきめの細かい議論が展開されてしかるべきであった。そこを初めて突破したのが同書であると位置づけられよう。いち早く、翻訳ストラテジー研究に取り組んだという功績はあると言ってよい。

### 3. その後の翻訳ストラテジーの諸学説

その後、翻訳の実践面での理論的展開として、多くの翻訳ストラテジー論が提案された。上述のように、等価を論じるなかで提案されたり、翻訳シフトを論じるなかで提案されたりしたものもある。しかし基本的には翻訳の理論と実践を橋渡しする論点がこのストラテジー論であり、さまざまな立場や多くの翻訳分野・ジャンルからの知見が提出されている。

翻訳ストラテジーの先行研究をコンパクトにまとめているのが、Chesterman（2005）、カーンズ（2013[2009]）、Gambier（2010）、稲生・河原（2010）、篠原（2013）であり、翻訳のメタ言語、メタ理論研究の観点で俯瞰的に図にしているのが Doorslaer（2009）である。これらを頼りに以下で概括的にまとめる。

まず Chesterman（1997）はこのストラテジーなるものの一般的特徴について述べている。プロセスであること、テキスト操作であること、目標志向であること、問題（解決）中心であること、潜在的に意識化したものであること、間主観的であること、である（Chesterman, 1997, pp. 87-92）。そのうえで、自身は 10 の統語的ストラテジーと 10 の意味論的ストラテジーと 10 の語用論的ストラテジーを提唱している。もともと言語学者でもあるチェスタマンならではの特徴づけと詳細な分類であると言える。

では、果たしてこのように細分化した分類を行う必要があるのだろうか。これまで提唱されてきたストラテジーの分類の数々を（網羅的ではないが）一部ここで挙げる。上述のように、翻訳シフトの一環として提唱されているものや翻訳テクニク論・メソッド論や翻訳等価論のなかで提唱されているものもあるが、一旦同じ俎上に載せて、理論的な検証を行う。

表 1 : 様々な翻訳ストラテジー論

<p>Vinay &amp; Darbelnet (1958/1995) 一般的翻訳ストラテジー : 7つの手続き、方法</p> <p>－直接的翻訳 : ①借用 ②語義借用 ③直訳</p> <p>－間接的翻訳 : ④転位 ⑤調整 ⑥等価 ⑦翻案</p>
<p>Nida (1964) 5つの調整技術 :</p> <p>①追加 ②代替 ③変更 ④脚注 ⑤言語から経験への調整</p>
<p>Catford (1965) 翻訳シフト :</p> <p>－レベルのシフト (文法から語彙へのシフト)</p> <p>－カテゴリーのシフト</p> <p>①構造的シフト ②クラスのシフト ③ユニットのシフト ④体系内シフト</p>
<p>Vázquez-Ayora (1977) 一般的翻訳ストラテジー :</p> <p>①直訳 ②間接的翻訳 (転位、調整、等価、適合) ③二次的翻訳 (拡大化、削除、補償、明示化)</p>
<p>Malone (1988) 一般的翻訳ストラテジー :</p> <p>①一致 (同等、置換) ②屈曲 (分岐、収束) ③再生 (拡大化、縮小化) ④並べ替え ⑤再構築 (拡散、凝縮)</p>
<p>Newmark (1988) 一般的翻訳ストラテジー :</p> <p>－8つの方法 (テキスト全体に関係) :</p> <p>①語対応訳 ②直訳 ③忠実訳 ④意味訳 ⑤翻案 ⑥意訳 ⑦慣用語法に則した訳 ⑧コミュニケーション重視訳</p> <p>－15の手続 (センテンスおよびそれ以下の単位) :</p> <p>①転移 ②文化的等価 ③記述的等価 ④同義語 ⑤語義借用ないしなぞり ⑥調整 ⑦補償 ⑧クプレ ⑨同化 ⑩機能的等価 ⑪成分分析 ⑫シフトまたは転位 ⑬広く認められた訳語 ⑭言い換え ⑮註、註解</p>
<p>van Leuven-Zwart (1989) 一般的翻訳ストラテジー :</p> <p>①調整 (特定化、一般化) ②修正 (意味論的・文体論的・統語論的修正)</p> <p>③変異 (追加、削除、根本的な意味変化)</p>
<p>Gottlieb (1992) 字幕翻訳の翻訳ストラテジー :</p> <p>①拡張 ②言い換え ③転移 ④模倣 ⑤複写 ⑥変換 ⑦圧縮 ⑧簡素化 ⑨削除 ⑩放棄</p>
<p>Franco (1996) 文芸翻訳における異文化要素の翻訳ストラテジー :</p> <p>①複写 ②音の適応 ③借用翻訳 ④註 (含ルビ) ⑤本文中の補足 ⑥類義語での言い換え ⑦限定一般化 ⑧絶対一般化 ⑨帰化 ⑩削除 ⑪創造</p>
<p>Chesterman (1997) 一般的翻訳ストラテジー :</p> <p>－10の統語的ストラテジー :</p> <p>①直訳 ②語義借用、なぞり ③転位 ④ユニットのシフト ⑤句構造の変更 ⑥節構造</p>

<p>の変更 ⑦センテンス構造の変更 ⑧結束性の変更 ⑨レベルのシフト ⑩レトリックスキーマの変更</p> <p>ー10 の意味論的ストラテジー :</p> <p>①同義語 ②反意語 ③上位語 ④反転 ⑤抽象化の変更 ⑥強調 ⑦拡張、圧縮 ⑧言い換え ⑨比喩の変更 ⑩他の意味論的変更</p> <p>ー10 の語用論的ストラテジー :</p> <p>①文化フィルター ②追加、削除 ③明示化、暗示化 ④対人的変更 ⑤言語行為の変更 ⑥一貫性の変更 ⑦部分的翻訳 ⑧可視化の変更 (註、註解など) ⑨翻訳編集 ⑩他の語用論的変更</p>
<p>Lomheim (1999) 字幕翻訳の翻訳ストラテジー :</p> <p>①省略 ②要約 ③拡大 ④一般化 ⑤詳述 ⑥中立化</p>
<p>Molina &amp; Albir (2002) 一般的翻訳ストラテジー :</p> <p>①適合 ②明示化、追加 ③補償 ④縮小化 ⑤一般化 ⑥直訳 ⑦言語的拡大化 ⑧語義翻訳 ⑨推論による創造 ⑩固定した訳語 ⑪特定化 ⑫転位 ⑬圧縮 ⑭借用 ⑮描写 ⑯置換 ⑰調整 ⑱変種</p>
<p>Davies (2003) 『ハリー・ポッターと賢者の石』での異文化要素の翻訳ストラテジー :</p> <p>①保持 ②付加 ③省略 ④グローバル化 ⑤現地化 ⑥変形 ⑦創作</p>
<p>Díaz-Cintas &amp; Remael (2007) 字幕の異文化要素一の翻訳ストラテジー :</p> <p>①借用 ②語義翻訳または直訳 ③明示化 ④置換 ⑤転移 ⑥語彙創造 ⑦補償 ⑧省略 追加</p>
<p>稲生・河原 (2010) ニュース字幕翻訳の翻訳ストラテジー<sup>註3</sup> :</p> <p>①命題保持訳 ②削除 ③言い換え ④補足</p>
<p>Pedersen (2011) テレビ字幕における異文化要素の翻訳ストラテジー (メソッド) :</p> <p>①保持 ②詳述 ③直接訳 ④一般化 ⑤置換 ⑥省略 ⑦公的等価</p>

以上を概括すると、これらは翻訳結果を静的に捉え、原文と訳出物との差である翻訳シフト (cf. Catford, 1965 など) を緻密に検証し、それぞれの基準で分類している分類学 (taxonomy) である。これらは翻訳者が翻訳実践行為において実際に活用すべき「ストラテジー」として提唱されたもので、表1のように諸説あり、いずれも説明力があるものである。しかし本稿は、これらの詳細な分類行為の背後にあるイデオロギーとその分類が狙っている目的に着目し、「翻訳理論の研究スタンス」の分析を試み、翻訳ストラテジーの諸説を整理してゆく<sup>註4</sup>。

そもそも「ストラテジー (戦略)」とは、『広辞苑』によると、「戦術より広範な作戦計画。各種の戦闘を総合し、戦争を前局的に運用する方法」であり、また *Longman Dictionary of Contemporary English* によると、“strategy” とは “a well-planned action or series of actions for achieving an aim / skillful planning in general” とあるように、一定の目標を達成するため

の計画的な方策のことである。ところが翻訳学の現状は、翻訳ストラテジーに関する用語、分類が百人百様であり、「用語上の混乱状態 (terminological mess)」にある (Pym, 2011, p. 92、Chesterman, 2005 や Gambier, 2010 も同趣旨)。

おそらくこれは翻訳理論を提唱する際の研究スタンスの違いが関係しているように思われる。その研究スタンスは、①記述的スタンス (descriptive stance) vs. ③関与的・介入的スタンス (committed/intervenient stance)、そして、②教育・評価的スタンス (pedagogical/evaluative stance) の大きく3つに分類されるだろう。また、翻訳行為全般に対する巨視的なものか、個々の翻訳の訳語選択における意思決定に関する微視的なものか、という分類もあり、これら2つを掛け合わせると、表2のマトリックスになる。

表2：翻訳ストラテジー論の布置

スタンス	①descriptive (規範 ; normative)	②pedagogical/evaluative (模範 ; prescriptive)	③committed (介入 ; intervenient)
ベクトル	retrospective ←————→ prospective 回顧的 (後向き)		prospective 展望的 (前向き)
巨視的・全体的 (macro, global)	志向性 (起点 vs. 目標)	指針 (起点 vs. 目標)	戦略 (抵抗 vs. 受容)
微視的・局所的 (micro, local)	方略 客観的シフト分析	手順と技法 目的達成の具体的方法	戦術 具体的攻略方法

まず、①記述研究の場合は、目標テキストが有している客観的なテキストの性質を同定するために、目標テキストと起点テキストとのシフトを丹念に比較対照し、シフトの性質を認定するための基準となるものがストラテジー (志向性) である。巨視的レベルでは起点志向か目標志向か、微視的レベルでは翻訳ユニットごとにどのようなシフトが起こっているかを分析する基準となるのがストラテジー (方略) ということになる。

②教育・評価目的の研究の場合、巨視的レベルでは、目標テキストを産出する全体の指針、ないし、評価をするうえでどのような指針が全体として採られているかを認定する基準がストラテジー (指針) である。そして微視的レベルでは、一定の翻訳目的を達成するための具体的な手順や、手順に従って採るべき技法を扱うのがストラテジー (手順・技法) である。また評価を行う場合は、どのような手順や技法が採られているかを認定する基準がストラテジーである。

③関与的スタンスの研究の場合は、背後に戦争の隠喩が潜んでいることに呼応し、ある種の敵を想定<sup>註5</sup>したうえで、攻撃の全体的な方針が戦略 (strategies) であり、微視的なレベルでの具体的攻略方法が戦術 (tactics) である、という位置づけになるだろう。

また、諸説が採用する混乱した用語を整理すると、表3のようになる。

表 3：翻訳ストラテジーをめぐる用語（類義語）の整理

レベル	用語
巨視的 全体的 (macro, global)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• strategy (Pym; Venuti; Gambier)</li> <li>• global strategy (Kearns)</li> <li>• method (Pedersen; Chesterman)</li> </ul>
微視的 局所的 (micro, local)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• strategy (Pedersen; Vinay &amp; Darbelnet; Vázquez-Ayora)</li> <li>• local strategy (Kearns) —この下位に、strategy と procedure</li> <li>• strategy (Chesterman) —この下位に、理解のストラテジーと産出のストラテジー</li> <li>• tactic (Gambier)</li> <li>• procedure (Pym)</li> </ul>

このように提唱者自身の主観的、恣意的な分類によりストラテジーの種類も多種多様であるし、翻訳行為全体におけるストラテジーの位置づけも立場によって多種多様であることが読み取れる。これは全く翻訳学のメタ言語の混乱に起因するのであるが（Gambier & van Doorslaer, 2009）、概念装置の概念定義、目的、分類法、全体での位置づけ、機能などについて統一的なコンセンサスが取れないならば、この混乱状況は続いてしまう。

この点に関し以下で、翻訳研究におけるメタ言語の混迷状況を憂いている主な研究者であるチェスタマン（Chesterman, 2005）とガンビア（Gambier, 2010）による諸論点の整理を紹介し、寸評を加える。

まずチェスタマンは翻訳ストラテジー論に関する5つの問題提起を行っている。(1) 用語の問題、(2) 概念・理論の問題、(3) 分類の問題、(4) 適用の問題、(5) 教育上の問題、の5つである（Chesterman, 2005）。

(1) 用語の問題としては、“strategy” という用語に類似したもの（類義語）として、“transfer” or “operation” (cf. Klaudy, 2003)、“procedures” (Vinay & Darbelnet, 1958)、“techniques” (Nida, 1964)、“transformations” (Retsker, 1974)、“techniques” and “procedures” (Newmark, 1981, 1988)、“shifts” (Catford, 1965)、“trajectories” (Malone, 1988) を挙げている。しかし、これらは論者のスタンスを明確にし、そのイデオロギーと目的を明らかにしつつ上記表2の布置に収めれば混乱が解決するものと思われる。

(2) 概念・理論の問題としては、(a) 結果 vs. プロセス、(b) 言語的 vs. 認知的、(c) 問題解決的 vs. ルーチン、(d) 全体的 vs. 局所的、の4つの下位論点を立てている。この点、(a) は5.1節、(b) は4節（意識 vs. 無意識の論点に関連させて）、(c) は4節で若干触れつつ5.3節、(d) は5.2節で扱う。

(3) 分類の問題としては、本稿ですでに述べたことと同様の問題提起をしている。また、目を引くのはチェスタマンがここで「義務的／選択的变化」という概念を導入し、絶対的

ではないものの有益かつ必要なものだとしている。しかしながら、これは本来、翻訳シフト論で論じるべき論点であり、詳しくは河原（2014a）を参照されたい。基本構成だけ示しておく、シフトを論じるには、その前提となる「不変」なるもの（翻訳の過程で変化しないまま残る要素）を措定しなければならない（Bakker & Naaijken, 1991）。これは、「翻訳等価」という概念が論じられる際に併せて論じられてきたものであり、比較のための第三項（*tertium comparationis*）もその一つである。翻訳シフトとの関係で言うならば、この不変なるものは、①翻訳前の模範的・規定的な必須条件となるか、②翻訳後の記述的・発見的な概念となるかに講学上は分かれる。詳細は以下の表4を参照されたい。

表4：翻訳シフト論の記述法（河原 2014a から引用）

不変なるもの	シフトの志向性	理論、概念
①翻訳前の模範的・規定的な必須条件	(a) 消極志向：「シフトするな」	等価からの逸脱、間違い、誤訳
	(b) 積極思考：「シフトせよ」	動的等価論、翻訳手順論
②翻訳後の記述的・発見的な概念	(c) プロセス志向	義務的シフト、選択的シフト
	(d) 結果物志向	言語学ベースの研究、文体論ベースの研究、記述的翻訳研究（規範研究）

(4) 適用の問題としては、実証研究において翻訳ストラテジーはどのようにしたら操作可能か、という問題があるとしている。例えば「訳出単位」(unit of translation) の概念自体、確立されていないため、どのストラテジーがどの単位で機能しているのかの同定が困難であるという問題提起をしている。これは翻訳ストラテジー研究においても、翻訳教育においても共通した難しさであると言えよう。

最後に (5) 教育上の問題としては、Chesterman は次のように明確に述べている。「概念は教育目的上、明確かつ簡素なものでなければならない。つまり、“portable” でなければならない」としている。これは「教育」という目的を明確に掲げてストラテジーを説明する場合には、非常に重要な点である。この点、学習者のコンピテンスとしての英文法力を養成することを目指した新しいタイプの英文法書である田中（2013）は、英文法の妥当性(教育・学習的妥当性)の3条件として、①teachability(教えることができる)、②learnability(学ぶことができる)、③usability(使うことができる)を挙げている (p. 17)。これは教育工学上の「妥当性」を説くもので、翻訳学においても、教育という応用場面での妥当性が純理論の妥当性や健全さを保証するという発想で、この3条件の観点からメタ言語の混乱状況を整理し直す作業は極めて有益だと思われる。

次にガンビアは、Chesterman（2005）を受けた論稿を展開し、ストラテジーの異なった分類法やストラテジーの重要な下位概念を挙げている（Gambier, 2010）。内容はほぼ Chesterman（2005）と同じではあるが、翻訳の作業プロセスの論点（本稿の6節で扱う）と、問題解決的 vs. ルーチンの論点（本稿の4節と5.3節で扱う）はオリジナリティが高

いので、後ほど検討する。

以上を承けて本稿は、理論のメタ分析のケーススタディとして、翻訳規範と翻訳ストラテジーの関係を批判的に分析し、その分析をとおして翻訳ストラテジーの論点の整理を行い、メタ言語の混乱状態を解消する試みを行う。

#### 4. 翻訳規範と翻訳ストラテジーの關係の批判的分析

チェスタマンはストラテジーとは「翻訳者が規範に従おうとする方法である。注意なのは、それは等価の実現を求めるための方法ではなく、単に考えられる最善の翻訳にするための方法である」としている (Chesterman, 1997, p. 88)。この「翻訳者が規範に従おうとする」心的作用は「規範意識」として定位できるものである。そしてこのチェスタマンの言明を引用するカーンズも「これは、ストラテジー研究が今後進むべき道を示しており、それには翻訳ストラテジーを詳細に吟味するための新たなカテゴリーと分類が必要になるだろう」とチェスタマンに追従する旨を述べている (カーンズ 2013[2009], pp. 215-216)。果たして翻訳ストラテジーと翻訳規範の關係をこのように捉えるのが正当なのか。次にこの言明の妥当性について検討する。

チェスタマンはトゥーリーの翻訳規範の考え方を敷衍した翻訳規範論を展開している (Chesterman, 1997)。これはイスラエル学派のイーヴン=ゾウハーの多元システム理論、そしてそれから派生して案出されたトゥーリーの翻訳規範論の流れ、つまり目標言語社会全体のシステムを規制する社会規範の一環として、社会全体、そしてそれが内包する翻訳実務家コミュニティという小社会を慣習的に規定する翻訳規範の議論の流れでチェスタマンも翻訳ストラテジーを論じているようである。これは、個々の翻訳者が規範に従おうとするもので、それは最善の翻訳を求めることであって、その具体的技術論がストラテジーであるという論法である。しかし、これは規範とアイデンティティ形成の關係性についての見識が甘い結果起こる誤謬を含んだ見解であると言わざるを得ない。

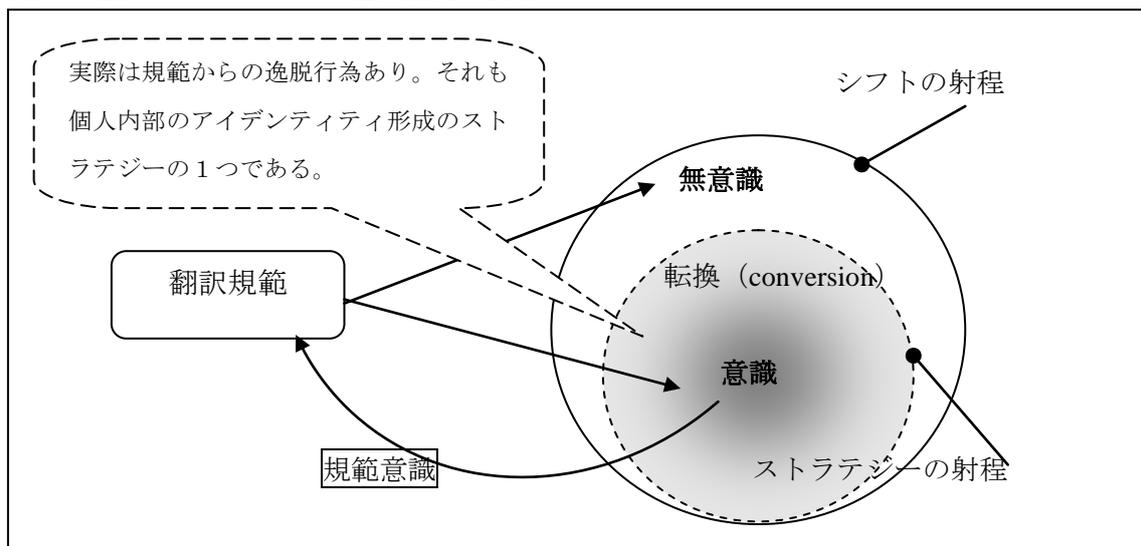
これは、等価の実現 (つまり構築) が最善の翻訳に努めることではないかのような誤解を与える言明であるが、等価はあくまでも翻訳を実践するときの努力目標として実際に機能しているという事実を見据えておかねばならない (河原 2013b, p. 118)。その際、さまざまなコンテクスト要因が作用することで、個々の翻訳者によって等価構築のあり方に相違が生じる、というのが等価構築性に照らし演繹されることである (河原 2014b)。

次に、どのような理論構成が考えられるかについて検討する。詳細な検討は翻訳の目的論、規範論、イデオロギー論などとの連関を見据えないと困難であるが、①等価構築の心的・認知的手続きに焦点を当てるか、②等価構築の結果に焦点を当てるかによって、等価構築の具体的な観察方法が異なってくる。まず②後者は起点テキストと目標テキストのテキスト的な「ズレ」として物質的に観察可能である。翻訳者が意識的・無意識的に等価構築行為を行った結果が、ズレ (shift) となって現れており、これは静的な産出物として客観的に捉えることができる。

では、①前者の心的・認知的手続きの面はどうか。これは翻訳者が過去の翻訳経験から翻訳プロセスのなかで起点テキストを意識的・主体的に転換する(ずらす)行為(conversion)とその意識に焦点を当てるものである。意識的・主体的に転換するのであるから、等価のあり方についても当然認識しているのである。しかしながら、自らが意識しえない何らかの縛り(規範なり慣習なり個人的行動性向・価値観・イデオロギーなど)が作用することで結果として自らが認識しないズレも生じる、というのが翻訳の等価構築の実際であるだろう。そして、前述した日常言語におけるストラテジーの語義を踏まえて、本来の定義を「翻訳ストラテジー(strategy)とは翻訳者が意識的にシフトを起こさせる、または最小限に抑える転換操作のことである」とするならば、[翻訳物のズレ]から[転換行為の結果物]を引き算したものが理論上は無意識的行為の結果物となり、ここにはストラテジーのような意識的行為が関与しない残余が存在することになる。そして理論上はこの残余範疇にも規範の規制は作用しているため、チェスタマンの言明は理論的に破綻することになる。

また、そもそも規範を逸脱することによって翻訳者が自身のアイデンティティを表出するという行動は、社会一般で見られる規範とアイデンティティの関係と同じであり(ゴッフマン 1985[1961]; 野村, 1992/1998)、チェスタマンがトゥーリーに依拠して特定の社会の総体を規制する規範を想定し、その構成員はすべてその規範に従うという着想がイデオロギー(虚偽意識)となって、規範、規範意識、ストラテジーといった概念の理論構成を曇らせていると言わざるを得ない。翻訳者コミュニティという社会を一枚岩なものに見立て、内部の構成員が一律に斉一的行動を取るという理論家のイデオロギーがここに読み取れる註<sup>6</sup>。以下を図示すると次のようになる。

図1：翻訳ストラテジーと翻訳規範の関係



## 5. 翻訳ストラテジーの諸論点と諸性質

以上を前提に、ストラテジーに関する先行研究をいくつかの論点ごとに検証する。

### 5.1 手続き的ストラテジー vs. テクスト的ストラテジー

一つ目の論点はストラテジーとは手続きなのか、手続きがテキストに現れた結果なのかということである。Molina & Albir (2002, p. 507) は翻訳ストラテジーの定義に、(a) 手続き的ストラテジーと、(b) テクスト的ストラテジーの大きな 2 つがあることを指摘している。これは前述のように、(a) は転換行為に関わる本来の翻訳ストラテジーの射程であり動的なもの、(b) は結果物の観察方法としての翻訳シフトに関するもので静的なものである。翻訳行為の分析のベクトルの方向としては、(a) は展望的（前向き；prospective）で実際の翻訳プロセスの中で問題解決としてどう訳語決定を主体的に行っていくかに関わる局面、(b) は回顧的（後向き；retrospective）であり、実際に翻訳された結果物としての目標テキストと起点テキストとを翻訳が終わった事後に分析する局面である。この点、レルシャー（Lörscher, 1991）の主張を引用しているカーンズのコメントは正当である。

レルシャーは、翻訳ストラテジーとは、「個々の翻訳者がある言語から他の言語にテキストの一部を翻訳する際、直面する問題を解決するための、潜在的に意識的な手続きである」という記述的定義を展開することで、それ以前の規定的見解（たとえば Hönig & Kußmaul, 1982）からの訣別を訴える（Lörscher, 1991, p. 76）。この意味での心的現象としてのストラテジーそのものは観察不可能であるが、研究者がストラテジー指標を分析することで復元できる可能性がある。（カーンズ 2013[2009], pp. 211）

重複を厭わず繰り返すと、翻訳ストラテジーに関する数多くの学説のうち、(a) 手続き的ストラテジーと、(b) テクスト的ストラテジーとして分類できるもののうちで本来的に「ストラテジー」と称するに値するのは (a) であり、(b) は「翻訳シフト」として静的なテキストベースの記述研究の対象となる項目であることを確認しておきたい。(b) テクスト的ストラテジーとは、手続きそのもの、翻訳ストラテジーそのものではなく、転換操作という手続きの結果という意味合いであり、その結果には翻訳者の意識的なストラテジーが関与していない無意識のシフトも含まれていることに留意する必要がある。（そうでなければ、トゥーリーの本来の翻訳規範の記述的研究の研究手法が破綻してしまうことになる。）このことを明確に認識したうえで、表 2 の①記述的スタンスで定位された翻訳ストラテジーとして (b) を分析し分類すると、用語上の混乱は避けられるものと思われる。

### 5.2 局所的ストラテジー vs. 全体的ストラテジー

もう一つの大論点としては、局所的ストラテジーと全体的ストラテジーの問題がある。全体的ストラテジーは、起点志向か目標志向か、あるいはこれを関与的・介入的スタンスで捉えるならば戦略として起点テキスト／目標文化に対して抵抗的な構えを持つか、受容的な構えを持つかの選択に関わることであり、どのテキストを翻訳する、しないといったトゥーリーのいう初期規範の論点に該当する事柄が争点となる。しかし、この全体的ストラ

テジーは、トゥーリーのいう運用規範の論点である基質的規範（パッセージの脱落・再配置・追加、テキストの分節化、脚注など）であるとかテキスト・言語的規範（語彙項目・句・文体的特徴などの選択）といった局所的なテキストの操作の全体的な集積があって初めて成り立つし（ボトムアップ）、逆に全体的ストラテジーのあり方が定まることでこれらの個別具体的な局所的ストラテジーのあり方も決定される（トップダウン）。規範との違いは、ストラテジーは主体的・意識的意思決定を行う対象を射程に入れていることである点である。これは特にヴェヌティが提起した異化／馴化（異質化／受容化）をめぐる一連の介入的アプローチ（Venuti, 1995, 1998）や、アイデンティティ・ポリティックスの陣営が展開する人道的・政治的なアジェンダ（Baker, 2006）と、それらを具現化するための実践的な局所的ストラテジーとが密接に関係する（本稿ではその詳細は割愛する）。いずれにしても、これらは等価構築のあり方、そしてそれに連動して翻訳ストラテジーのあり方を全体的にも局所的にも機制する大きな要因であることは確かである。

### 5.3 問題解決的 vs. ルーチン

これは翻訳ストラテジーの自動化（無意識化とは異なる）に関わる論点である。まず、翻訳ストラテジーは「問題解決」のためであるという想定がある。例えば、Lörscher (1991, p. 76) は「翻訳ストラテジーとは、ある言語から別の言語へテキストの断片を翻訳する際に個人が直面する問題を解決するための、潜在的に意識した手続きである」としている。これはテキスト面ではなく、認知面に焦点を当てた定義であり、本稿の趣旨にも適っている。また、これは問題解決に関連したもので、分析ストラテジー、調査ストラテジー、再策定ストラテジーなどがあり、翻訳ストラテジーを手続き的なものとして正当に位置づけている。

翻訳ストラテジーは心的・認知的手続きを本性とするため、時間とともに手続記憶と化するなかで、自動化が促される（Chesterman, 2005, p. 21）。この点、自動化と意識の関係を考えておかなければならない。問題解決には意識は不可欠である。ところがある解決ストラテジーを頻繁に使用することでそれがルーチン化してしまうと、ストラテジーが制御不能になるとか無意識のものになると思われがちであるが、そうではない。翻訳者は通常、自覚した意識がないまま翻訳を行うが、必要ならば意識的に内省や分析を行うことはできるのであり、訓練や実務作業の反復によって習得され検証されるなかでストラテジーの自動化・内在化が進むのである（Gambier, 2010, p. 417）。したがって、自動化し普段意識していないからといって、翻訳ストラテジーが無意識下に移動するのではないと理論的には構成される。無意識化の範疇は前述のように翻訳シフトとして分析するのが妥当である。

## 6. 翻訳ストラテジー論の今後の展開——実務を射程に入れて

以上のように、翻訳ストラテジーの理論の全体像は、まず総論として表2で示したように翻訳の研究スタンス（記述的、教育・評価的、関与・介入的）の同定とマイクロかマクロ

かの位相の違いを考慮する。そして各論として具体的なストラテジーの分類作業を、5 節で示した①手続き的ストラテジー vs. テクスト的ストラテジー、②局所的ストラテジー vs. 全体的ストラテジー、③問題解決的 vs. ルーチン、に応じて峻別する、という構成となる。既存の翻訳ストラテジーの諸論もこのような観点から分析すると、有益性と機能性が増すと思われる。その際、ある程度、翻訳ジャンルごとに峻別して翻訳ストラテジーを体系化していくことが必要となる。一般的な翻訳ストラテジーなのか、例えば映画字幕翻訳のストラテジーなのかで、ストラテジーの全体的構成も異なってくる。(この点、近時の翻訳プロセス研究の動向も幅広く見てゆかねばならない。)

最後に、理論と実務との架橋の作業が必要となる。これは多く出版されている翻訳実務のための実用書を分析し、共通項を抽出して上述の体系に当てはめてゆく作業を行うことになる。テキストベースの極めて局所的な議論として、品詞論の転換というストラテジーに関して試みたものに、註 1 で示した河原 (2010) がある。しかしながら、理論と実務の橋渡し作業を本格的に行うためには、以下の 3 つが必要となろう (Chesterman & Wagner, 2002, pp. 57-58)。これは、*Can Theory Help Translators?—A Dialogue between the Ivory Tower and the Wordface* という、理論家と実務家との興味深い対話が展開している文献からである。

- ①調査のストラテジー：特定の用語をどうやって見つけるか、インターネットのどこを探るか、誰に電話をして尋ねるか、、、。プロを養成する翻訳コースで教えることとして、辞書の引き方、パラレルテキストの見つけ方や使い方、用語リストの探し方、利用の仕方などが調査に関するストラテジーである。
- ②創造性のストラテジー：行き詰ったらどうするか、脳が動かなくなったらどうするか、、、。散歩に行く、コーヒーをもう一杯飲む、同僚に聞く、ジャズやモーツァルトを聞く、即断せず一晩考える、他のことを考える、空想する、違う箇所を訳す。このようなことは教えてもらうことではないが、コーヒーでも飲みながら気軽に話されるトピックであり、一般的に創造性を高めるストラテジーである。
- ③テキスト的ストラテジー：起点テキストをどうやって処理するか、どうやってもっと違う訳出を思いつくか、どうやってメタファー、方言、引喩、倒置構造、レトリック上の問題を訳すか。プロが問題解決のために使っているテキスト上のストラテジーは、上の 2 つと比べるとかなり多く研究されてきた。

以上の①②は翻訳理論の眼差しからすると無視してもよい項目であるようにも思われるが、翻訳の作業効率や質の向上を真摯に図ろうとするなら、翻訳プロセスの包括的な考察をしたうえで、正面から理論的に精緻化する価値のあることだと思われる。

これに関し、「翻訳の作業プロセス」として翻訳ストラテジーを見る見解もある (Gambier, 2010, p. 415)。

—翻訳前の理解のストラテジー (構成上のストラテジー、読解のストラテジー、テク

スト分析のストラテジー、用語検索や情報検索の調査のストラテジー、専門家への相談など)。

－翻訳中の産出のストラテジー（草稿を書き上げ、局所的な問題を解決し、翻訳の最終稿を仕上げる）、修正のストラテジー、生き残りストラテジー。

－翻訳後：最終の作品をどのように提示し流通させるか、媒体をどのように選ぶか、どのように支払を受けるか。

以上のように、テキストベースの静的な翻訳ストラテジー分析に終始した枠組みから、実務を視野に入れながら、翻訳の作業プロセス全体を射程に入れた翻訳ストラテジー論の展開も今後必要となろう。

.....

**【著者紹介】**

筆者紹介：河原清志（KAWAHARA Kiyoshi）金城学院大学文学部准教授。専門は通訳翻訳学・メディア英語学・社会記号論・認知言語学。

.....

**【註】**

- 1) 安西徹雄『英語の発想』『翻訳英文法徹底マスター』『翻訳英文法トレーニング・マニュアル』、安西徹雄・井上健・小林章夫（編）『翻訳を学ぶ人のために』、田辺希久子・光藤京子『プロが教える基礎からの翻訳スキル』、亀井忠一『頭からの翻訳法』、中村保男『翻訳の秘訣 理論と実践』、三好弘『すぐつかめる英語翻訳のコツ』、横井忠夫『誤訳悪訳の病理』、荒竹三郎『英文翻訳ルールブック』、別宮貞徳『翻訳読本 初心者のための八章』、中村眞佐男・氏木道人・氏木孝仁『翻訳入門—英日編—』、岳真也『英日翻訳文章表現法 英文和訳から翻訳へこなれた日本語表現の技法』、竹下和男『英語は頭から訳す 直読直解法と訳出技法 14』を参考に、品詞転換ストラテジーについて認知言語類型論に依拠して論じた。
- 2) 尤も、ヴネイとダルベルネは、仏独語を比較したマルブラン（Malblanc, 1944/1963）からヒントを得ている。
- 3) ニュース字幕翻訳の分析の手順は以下が考えられる（具体例は、稲生・河原 2010 参照）。まず、英語原文と日本語字幕翻訳を訳出単位ごとにパラレルに並べ、命題（ないし項）がそのまま保持されている部分を同定する（命題保持訳）。次に、原文にあり翻訳にない箇所を同定する（削除）。そして、原文が何らかの形で別の日本語表現に言い換えられている箇所を同定する（言い換え）。さらに、原文にはなく、翻訳文にのみ現われている補足的な表現を同定する（補足）。これらの作業を行うと、英語原文と日本語字幕翻訳との対応関係がすべて抽出できるので、実際の翻訳者もこの4つの転換操作を行っているものと思われる。したがって、①命題保持訳 ②削除 ③言い換え ④補足、という4つの転換操作を以ってニュース字幕翻訳における「訳出ストラテジー」と筆者は位置づけている。そしてこれは即座に翻訳教育ツールにもなる（実例として筆者が2010年度前期に津田塾大学で行ったドキュメ

ンタリーフィルムの日英字幕翻訳の教育実践がある。河原 2011 参照)。

また、この4つのストラテジーを採用する背後にある理由・動機を3つの側面から分析し(翻訳行為の状況—①言語的側面、②コミュニケーション的側面、③社会・文化的側面)、なぜこれら4つのストラテジーを現場で採用するのかについての理由を理論的に明らかにすることで、訳出現場での諸ストラテジー採用の意思決定の正当化や合理化が図られ、翻訳教育にもこれを応用することができると思われる(稲生・河原 2010)。このように、翻訳理論の構築を教育方法論の構築と合一化させることは、研究スタンスとして重要であると筆者は考える。なぜなら、理論構築のスコピスを特定化することで余計なメタ言語の混乱状況を整理することができるからである。

- 4) 言語による理論化の過程は、①類像作用、②指標作用、③象徴作用が三位一体となった、社会的な指標的類像化、象徴的類像化の複合的な過程であり、類像的な言説の反復使用(詩的機能)により、社会的類像化が更新され強化されるという社会的な意味構築と意味改変を繰り返す過程である(河原 forthcoming)。これは C. S. パースの記号論を援用した言語人類学系社会記号論(Silverstein, 1976 など; 小山 2009 など)を敷衍したものであり、ここで言う③が「イデオロギー」に該当する。また、言語的・文化的・社会的行為・出来事が生起する空間は、多次元が相互に交叉する空間であり、それには行為・出来事の持つ、(a) 合目的的機能(「機能1」)と(b) 非・合目的的機能(つまり、行為者の目的意識などに基づかず、行為者の意識には、そのままのかたちでは、ほとんど上らないが、それにもかかわらず、現実の社会において作用している機能、すなわち、「機能2」)の次元が含まれ(小山 2009, pp. 240-242)、この機能1が「目的」に該当する。本稿ではこれらの複雑な諸要素の複合体を「翻訳理論の研究スタンス」として論じている。
- 5) ジェンダー研究からの翻訳理論であれば男性ないし男性性が、ポストコロニアリズム研究からの翻訳理論であれば少数派を支配する存在全般(西洋の大国、諸々の社会的マジョリティなど)が(否定項として、想定上の)敵となりうる。
- 6) 規範論を役割論との関連で論じてみると、次のようになる。一方で役割規範には諸個人を同調させる規範統制的側面と、他方で個人の欲求充足を起点として、社会秩序を流動化させ、新たな構造を形成してゆく規範の再構造化の側面とがある(棚瀬 1992)。そして、相互行為過程で役割の内容が当事者の自由な交渉・合意によって形成される面がある一方、この流動性を否定せず個人にとって容易に変更できない所与のものとして感ぜられる役割の安定性・社会性、つまり役割の規範化・制度化の面もある。このように、役割には制度化の2つの方向、つまり行為者が多数の役割期待を統合し調整しつつ獲得するというハビトゥス形成と、共通価値を媒介にして役割が社会性・安定性を獲得するという社会制度形成が見られる。前者が廣松のいう役柄であり、後者が物象化である(廣松 2010)。

他方、このような制度化・固定化という志向性がある反面、役割の再構成、規範の更新・改編の絶えざる動きも存在する。これは人が日々の社会实践において役割関係を再生産すると同時に、変化を求める存在でもあり、そのことによって意識的・無意識的に役割から距離を取ったり、競合する役割・規範をめぐる葛藤から新たな秩序を生み出そうと逸脱行動を行

ったりし、そのことにより新たなアイデンティティを再編する、という営為を行う。これは一回一回の役割行動の実践として現象化するものと言える。

以上からすると、トゥーリーは規範の抽出という記述的研究を累積することで、翻訳に関する一般原則を引き出し、翻訳研究の科学性と体系性を求めようとしているが (Toury, 1995/2012)、これは翻訳規範を法則性へと昇華させる志向性や、翻訳者の役割の「役柄」や「物象化」の側面を照射する志向性が強いために (上記註4にいう合目的的機能のこと。翻訳理論の用語で敢えて言えばスコ-posに当たる)、翻訳ストラテジー論の理論構成へも不慮の影響 (上記註4にいう非・合目的的機能のこと) を生じさせてしまった、とメタ分析できる。

### 【参考文献】

- Baker, M. (2006). *Translation and conflict: A narrative account*. London & New York: Routledge.
- Bakker, M. & Naaijken, T. (1991). A postscript: Fans of Holmes. In K. van Leuven-Zwart & T. Naaijkens (Eds.), *Translation studies: State of the art* (pp. 193-208). Amsterdam: Rodopi.
- Catford, J.C. (1965). *A linguistic theory of translation*. Oxford: OUP.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of translation*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Chesterman, A. (2005). Problems with strategies. In Károly A. & Àgota F. (Eds.), *New trends in translation studies. In honour of K. Klaudy* (pp. 17-28). Budapest: Akadémiai Kiadó.
- Chesterman, A. & Wagner, E. (2002). *Can theory help translators?—A dialogue between the ivory tower and the wordface*. Manchester & Kinderhook: St. Jerome Publishing.
- Davies, E. E. (2003). A goblin or a dirty nose? The treatment of culture-specific references in translations of the Harry Potter books. *The Translator*, 9(1), 65-100.
- Díaz Cintas, J. & Remael, A. (2007). *Audiovisual translation: Subtitling*. Manchester & Kinderhook: St. Jerome Publishing.
- Doorslaer, L. van. (2009). Risking conceptual maps: Mapping as a keywords-related tool underlying the online *Translation Studies Bibliography*. In Y. Gambier & L. van Doorslaer (Eds.), *The metalanguage of translation*. (pp. 27-43). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Franco, J. A. (1996). Culture specific items in translation. In R. Alvarez & M. Carmen-Africa Vidal (Eds.), *Translation, power, subversion*. (pp. 52-78). Clevedon: Multilingual Matters.
- Gambier, Y. (2010). Translation strategies and tactics. In Y. Gambier & L. van Doorslaer (Eds.), *Handbook of translation studies volume 1* (pp. 412-418). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Gambier, Y. & van Doorslaer, L. (Eds.), (2009). *The metalanguage of translation*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Gottlieb, H. (1992). Subtitling: A new university discipline, In Dollerup Caj et al. (Eds.), *Teaching*

- translation and interpreting* (pp. 161-170). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Hönig, H. G. & Kußmaul, P. (1982/1991). *Strategie der Übersetzung. Ein Lehr- und Arbeitsbuch* (4th edition). Tübingen: Narr.
- Jääskeläinen, R. (1993). Investigating translation strategies. In S. Tirkkonen-Condit & J. Laffling (Eds.). *Recent trends in empirical translation research* (pp. 99-120). Joensuu: University of Joensuu.
- Klaudy, K. (2003). *Languages in translation*. Budapest: Scholastica.
- Krings, H. P. (1986). *Was in den Köpfen von Übersetzern vorgeht. Eine empirische Untersuchung der Struktur des Übersetzungsprozesses an fortgeschrittenen Französischlernern*. Tübingen: Narr.
- Lomheim, S. (1999). The writing on the screen: Subtitling: A case study from Norwegian broadcasting (NRK), Oslo. In G. M. Anderman (Ed.), *Word, text, translation* (pp. 190-208). Great Britain: Multilingual Matters.
- Lörscher, W. (1991). *Translation performance, translation process and translation strategies: A psycholinguistic investigation*. Tübingen: Narr.
- Malblanc, A. (1944/1963). *Stylistique compare du français et de l'allemand: Essai de representation linguistique compare et étude de traduction*. Paris: Didier.
- Malone, J. L. (1988). *The science of linguistics in the art of translation: Some tools from linguistics for the analysis and practice of translation*. Albany: State University of New York Press.
- Molina, L. & Albir, A. H. (2002). Translation techniques revisited: A dynamic and functionalist approach. *Meta*, 47(4), 498-512.
- Munday, J. (Ed.), (2009). *The Routledge companion to translation studies*. London & New York: Routledge.
- Newmark, P. (1981). *Approaches to translation*. Oxford: Pergamon Press.
- Newmark, P. (1988). *A textbook of translation*. New Jousey: Prentice Hall.
- Nida, E. (1964). *Toward a science of translation*. Leiden: Brill.
- Palumbo, G. (2009). *Key terms in translation studies*. London & New York: Continuum.
- Pedersen, J. (2011). *Subtitling norms for television*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Pym, A. (2011). Translation research terms: A tentative glossary for moments of perplexity and dispute. In A. Pym (Ed.), *Translation research projects 3* (pp. 75-110). Tarragona: Intercultural studies group. [Online: [http://isg.urv.es/publicity/isg/publications/trp\\_3\\_2011/](http://isg.urv.es/publicity/isg/publications/trp_3_2011/)]
- Retsker, Ya. I. (1974). *Teoriya perevoda I perevodcheskaya praktika*. Moscow: Mezhdunarodnie otnosheniya.
- Silverstein, M. (1976). Shifters, linguistic categories, and cultural description. In K. H. Basso & H. A. Selby (Eds.), *Meaning in anthropology* (pp. 11-55). Albuquerque, NM: University of New Mexico Press.
- Toury, G. (1995/2012). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam: John Benjamins

- Publishing Company.
- van Leuven-Zwart, K. (1989). Translation and original: Similarities and dissimilarities, I. *Target*, 1(2), 151-81.
- Vázquez-Ayora, G. (1977). *Introducción a la traductología*. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London & New York: Routledge.
- Venuti, L. (1998). *The scandals of translation*. London & New York: Routledge.
- Vinay, J.-P. & Darbelnet, J. (1958/1995). *Stylistique comparée du français et de l'anglais*. Paris: Didier. translated and edited into English by Sager, J.C. & Hamel, M.J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- ゴッフマン, E. (1985). 『出会い—相互行為の社会学』 (佐藤毅・折橋徹彦・訳). 誠信書房. [原著: Goffman, E. (1961). *Encounters: Two studies in the sociology of interaction*. Indianapolis: Bobbs-Merrill].
- 廣松渉 (2010). 『役割理論の再構築のために』 岩波書店.
- 稲生衣代・河原清志 (2010). 「英語ニュースの字幕翻訳ストラテジー」 青山学院大学英文学会 (編) 『英文学思潮』 第 83 卷, 31-55 頁.
- 河原清志 (2010). 「翻訳とは何か—研究としての翻訳 (その 4): 品詞転換論」 山岡洋一『翻訳通信』 103 号 [<http://honyaku-tsushin.net/ts/kenkyu4.html>].
- 河原清志 (2011). 「字幕翻訳における文化的要素の翻訳ストラテジー」 日本国際文化学会第 10 記念全国大会 (名桜大学) 口頭発表.
- 河原清志 (2013a). 「シフトと方略」 鳥飼玖美子 (編著) 『よくわかる翻訳通訳学』 (120-121 頁). ミネルヴァ書房.
- 河原清志 (2013b). 「等価」 鳥飼玖美子 (編著) 『よくわかる翻訳通訳学』 (118-119 頁). ミネルヴァ書房.
- 河原清志 (2014a). 「翻訳シフト論の潮流と社会記号論からのメタ理論的総括」 『金城学院大学論集』 第 11 巻第 1 号, 7-30 頁.
- 河原清志 (2014b). 「翻訳等価論の潮流と構築論からの批評」 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト (編) 『翻訳研究への招待』 第 11 号, 9-33 頁.
- 河原清志 (forthcoming). 「翻訳等価性再考: 社会記号論による翻訳学のメタ理論研究」 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科提出予定博士論文.
- カーンズ, J. (2013). 「Strategies 翻訳ストラテジー」 ベイカー, M・サルダーニャ, G. 『翻訳研究のキーワード』 (藤濤文子・監修・編訳). (210-216 頁). 研究社. [原著: Baker, M. & Saldanha, G. (2009). *Routledge Encyclopedia of translation studies*. London & New York: Routledge].
- 小山亘 (2009). 『記号の思想』 三元社.

- 野村一夫 (1992/1998). 『社会学感覚』文化書房博文社. (ウェブ版 : <http://www.socius.jp/lec/index.html>、2011年6月20日情報取得)
- 篠原有子 (2013). 「映画『おくりびと』の英語字幕における異文化要素 (日本的有標性) の翻訳方略に関する考察」日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト (編) 『翻訳研究への招待』第9号, 81-97頁.
- 田中茂範 (2013). 『わかるから使えるへ 表現英文法』コスモピア.
- 棚瀬孝雄 (1992). 『紛争と裁判の法社会学』法律文化社.